

社會心理的相互作用の過程

白 井 二 尙

(一)

獨逸學界に於て長く學としての成立を認容されず、僅かに法律學、經濟學、言語學、民族心理學等の一隅に席を與へられて居たに過ぎなかつた社會學的研究が、漸く獨立的地位を得、特殊科學としての自らの歩みを辿り初めるに當つて、先づ其の主流をなしたものは云ふ迄もなくジンメルによつて創められた形式社會學である。併しなから形式社會學の提唱によつて社會學は一義的に方法と對象とを與へられたのは決してなく、今猶他の科學の領域に於ては見出し難い程激しくして又紛亂せる論争の舞臺をなし、方法論上の不明瞭性は之迄の多くの論争によつて減せられるよりも増加せしめられたかの如き觀があると云ふ歎きさへ漏らされる有様である。ジンメル及び彼の流を汲む人達が説くが如く、諸々の文化内容と社會的相互作用の形式とを峻別し後者のみを對象として、果して獨立なる學としての十分なる内容を持

つ事が出来るかどうかも疑はしく、既にジニメル及び其の後繼者と見做される人々の實行して居る所を見るも、種々の内容と結合せる形式を取扱つて居るのを見るが、更らに進んで、抑も斯く形式を内容より抽象して研究せんとする方法が、社會の學としての社會學にとつて眞に正しい方法であるか否かは社會學今後の發達を規定す可き根本問題として深い省察を待つ問題である。社會そのもの、社會をして社會たらしめる社會のイデーは、諸文化内容を身體となし、諸文化現象の中に初めて自己を顯示し客觀化するものであつて、社會學にして空虚且つ皮相なる論述に墮せざらんが爲めには、飽く迄形式と内容の結合に於て社會の本質を直觀し記述する可きであり、此の意味に於て形式社會學以外の方法によつて今後の社會學は建設されなければならぬと考へられる。

併しながら、諸文化内容を社會學に取入れ、しかも、夫々の内容を對象として持つ特殊社會科學の外に、斯る諸科學の成果を集め之に學の名を附する所謂古き百科全書的社會學にも至らず、また單なる普遍史に至る事もなき當來社會學の建設は如何にして可能なるかは、未だ何人によつても明瞭には説かれない。斯くて社會學は今猶確固不動なる基礎を有たず、自らの歩みを初めながらも、依然として薄明の中を摸索

するの狀態を脱し得ない。けれ共之を以て社會學獨特の狀態となす事は出來ない。現代の精神科學は程度の相違こそあれ何れも斯る摸索彷徨の苦悶の中にあると云はなければならぬ。我等は斯る實狀に對して如何になす可きであらうか？明瞭にして不壞なる基礎を興へる人の出でる迄、凡ての摸索と試行とを中止して佇むのが正しい態度であるとは云へないであらう。むしろ不満足なりとは云へ、舊き道を一層先端に迄進め行く事によつて、或は又之を根源に溯る事によつて、正否にかゝらず此の舊き道を一層明かならしめ、斯くてまた新しき道に對する用意にも資し得んことを願ふは舊き道によつて育てられた者として最も穩當な態度ではあるまいか。斯くて私は形式社會學に於て最も新らしく論せられて居ると見らる可き一面に就いて二三の未熟な考察を試み度いと思ふ。

(二)

形式社會學的立場に立つと云ふのみでは未だ問題の所在方向は直截明瞭に規定されない。形式なる語は舊百科全書の方針を排除する事に於て效あるも、社會形式とはそもく何を意味するか、此の形式を社會生活の内容から解き放つて適切なる

概念に於て把握する事に成功す可き處置は、如何なる論理的性質を有するものなるかと云ふ問題を抱いて、之に關係せる最近の文献に一瞥を投ずれば、此の形式なる概念の多義多様を極めて居る事が直ちに知られるであらう。從來の形式社會學に於ては、形式とは社會的相互作用の形式なるか、又は相互關係の形式なるかを區別されなかつたが、生滅常なき相互作用を以て社會の本質となすこと能はず、行爲又は作用の如く中斷の可能を含まずして不斷に存續す可き状態としての性質を有つ社會關係こそ、社會の本質をなすものであり社會學の中心的對象をなす可きものなる事が高田博士によつて唱へられた。相互作用と相互關係とを區別しなかつた爲に、これ迄種々の混亂が醸された事は確かであり、關係は其から生ずる相互作用とは別なる自らの一定の確たる性質を有ち、個々の相互作用から導き出す事を許さぬものであり、個々の相互作用の和又は此等がもつ共通性への抱括的な名稱でない事も疑ふ餘地がないであらう。併しながら相互作用は相互關係から切離される可きものであると同時に、社會關係を接觸の用意、又は人々の間に取交はされる態度の用意と定義する時斯る用意の向けられる接觸又は取交はされる態度の少く共主要内容をなすものは相互作用であり、從て社會關係は相互作用に表はれる可き豫想を含み、又その

相互作用は關係に規定される事を豫想する。勿論此の用意は行爲ばかりではなく感情又は不作爲としても表はされるであらう。更らに進んで考へれば用意は明瞭なる意識範圍の事柄ではなく、意識内容の去來とは或る度迄没交渉に存續し従て社會關係は行爲又は相互作用とは無關係に、それ自體を直觀することによつて本質が捉へられるとも云はれるであらうが、或る態度の用意はその態度に出でたる時、即ちその態度を實現した場合に、最も完全になつたと見られ得るであらう。行爲に於て最も十分の姿になつたと見られ得るであらう。⁽¹⁾従て關係はそれ自體を直觀する時よく把握されるとしても、行爲に表はれた姿を見ることによつてその特質が一層明かに認識され得るであらう。斯くて具體的現實的なる社會關係の上に生ずる接觸相互作用は其の表面の波の如く千差萬別の異質的なるものであるとしても、概念上或る社會關係は如何なる類型の接觸又は相互作用に向つての用意なるかを明かにすることによつて、その特性を明かにされる所があると思ふ。關係と作用が明確に區別される可くしてしかも混合されたのは、兩者の間に深い聯關があるためではあるまいか。従て右の如く區別された相互作用が社會學的研究の周邊に位する可きものであるとしても、猶多小の考察に値ひすると思ふ。ジンメルが人間の性格と

個々の行爲について云つたことは、どつて以て社會關係と相互作用との關係を明かにする比喩とすることが出来ると思ふ。レオナルドがデオコンダの魂の豊けさの中に認めたと云ふ一種の統一は、デオコンダの個々の行爲から導き出されるものではなく、個々の行爲を其の統一から必然的に導き出す事も亦人間の知力を絶した事であらう。併しながら此の故に兩者の間に深い聯關の存する事を拒むことは出来ない。デオコンダは無數の雜多な行爲をなすであらう、その一々を彼女の魂の統一的な姿から因果必然的に導き出すことは不可能であるが、しかも猶各の行爲は彼女のものとして相應しいものであり、また中にも特に彼女の性格を最もよく最も純に表すものがあるであらう。凡て、人物又は團體の特性は夫々の差異に従て、同一の外的因素から成る一つの結果が發展し出るか又は之と正反對のものが發展し出でるかを規定する。併し此の特性はそれ自身何であらうとも、經驗的に之を認識するのは常に只その行爲への外發によつてのみ可能である。結果の差異の心的誘因たる性格魂、根本的情趣等は決して直接把握する事は出来ない。斯る人間精神の全體は只彼の個々の活動に於て與へられ、それから構成して老へる事が出来るのみである。只人格との直接の接觸に於て、又はその量の難き實相の直觀に於てのみ、我等

に對して、恰も實體がその偶性の變遷の中に自己を保持する如くあらゆる心的過程の下に或は中に自らを保持する所の人格の統一的なる精神特性の感じが成立する。併しながら一性格が我等に正しく認識されるのは只その個々の表出に依るの外はない。しかも更らに斯くて得られる性格の意味は之れを超えて居る實在なるものを指示し、意欲と思惟の多様に分解されず、反て逆に之れの總括及び解明として作用する所の不動なる一點を指示することを我等は感ずる。しかも此のものゝ内容には已に知られたる個々の意欲や思惟の外に之を求めるところは出來ない。此處に於いて、與へられたる諸の現象からその原因となる一つの力を、此の力から前者を説明せんが爲めに、構成せねばならぬと云ふ、屢非難された循環論が我等の前に横たはる。併しながら之は避く可らざるものである。個々の心的事象は無數の場合に於てそれが一定の性格から發生する時初めて完全に理解し、整序し、評價することが出来る——しかも此の性格は只此等個別的なる事象からのみ推知する事が出来るのである。⁽²⁾ 個々の心的事象行爲と、その背後に存する性格との間には斷つ可らざる聯關があり、一を究める爲めには他を究める事が必要であり、他を明かにすることは同時に一を明かにする所以であると云はれ得る。同様なる聯關はまた、社會關係と相

相互作用との間にも存することが想定されるところと思ふ。例へば愛は愛する行爲に對する心の用意と見ることが出来るであらう。今通常愛と云はれて居るものには種々の種差の存在する事は少時措き、愛なる用意と、自己と愛の對象との間に於ける心的相互作用を併せて考へて見やう。人々の間に日に生じ來るいとも多様な喜びと悲しみとの交代の中にあつて、愛又は憎しみの關係は全く變化することなく存續し、斯くして愛憎の關係にある人々の間の具體的なる相互作用は、此の關係によつては何等規定されざる多様性を持つが如くでありながらも、猶我等は次の如く云ひ得るであらう。即ち、愛せられる對象は喜びと同様にまた惱みの源泉たり得るが、前者の源たる事に於て、より豊かであると。誠に愛は、相手が我に報ゆる愛の缺乏の意味に於て不幸なる時も、作用としては同様に高度の幸福感を伴ひ、愛の對象が苦患と痛苦を惹起す時にも同様である。愛はそれが一方のみの愛なる場合にも、其から表はれる作用は幸福感を伴ふことに於てそれ自身の眞實性を呈露する。苟んや相愛の關係にある人々の間に於ける心的相互作用は、濫かく和かなる感情に包まれつゝ行はれる可き高度の蓋然性を持つ。相互作用の一契機としての共感 (Mitgefühl) をとつて見るも、愛と共感との間には、獨自の本質的聯關がある。我等は愛する量と深さと

に應じて共感するのみである。^{○(3)}斯くて相互作用の觀察からその基としての關係、心の用意を直ちに見る事は出來難いとしても、相互作用は關係を基とし、背景として見る時に最も明かになり、同時に關係の特質もまた之から推定されること、彼の個々の行爲とその基たる性格との如くであると云ひ得られるであらう。

更らに進んで社會團體について見るに、團體を扱ふに當つては團體内の個人の態度ではなく、團體そのものを全體として取扱はねばならぬと論ずるクラカウエルの如きも、團體を理解する爲めには同時にまた頗る屢、再び個人の中に行はれる意識活動に立戻らねばならぬと云ひ社會的團體は如何なる種類にもせよ意識の經過そのものゝ觀察からは生れては來ないが、⁽⁴⁾その開發は常に志向的存在と活動とに導かずには居らぬ事を説いて居る如く、社會關係又は社會團體の組立てを完全に把握する爲めにはそれ等の靜的なる圖式を心的相互作用の動的因子によつて補ふ事が大切であると思ふ。人格の姿はそれに於て將來蓋然性あるもの又はなきものと見做される可き行爲を究め、脱逸的なるものも猶可能性あるものとして説明し得可き範圍を究めその人格の内的原理から推して想定し得る所の發展と變化とを究めることによつて補はれるであらう如く、社會化されたる人間間の相互作用に於ける意識

より出で、意識に向ふ諸の過程そのもの考察も、社會關係究明を補ふ意義を持ち得るのではあるまいかと思はれる。斯く社會關係より明瞭に區別されたる意味に於ける、社會化されたる人間の志向的・生活に於て純粹に社會化の結果表はれる所の心的相互作用の過程を分析することは、形式社會學の一課題になり得ると思はれる。

然らば社會化そのものと共に定立され、純粹に社會的關係から生じ來る心的作用は、他の個人心理的作用と如何なる點に於て異なるか？單に志向的對象として他我を含むのみでは、未だ社會的とは云はれない。作用が外發して他の主體に向ふ事彼の中に入り込み、彼によつて知られることを求める事に、社會的作用の本質が存するとなして、之を缺く他の作用と區別する人があるが、斯る知られることを求むる作用に於ても、例へば告知 (Kundgebung) の如く一人の抱く精神的内容を他人が認め知れば、それでその目的を達し、精神的内容を投げ出すことを以て開かれた作用の系列が、此の認める事を以て閉されると見られ得るものと、例へば命令の如く單なる意識内容の傳達のみを以て完結するとは云ふ可らざる、本質上更らに進んで之に對應する又は應唱する (respondieren) 活動を目指し、之を見出す事に於て一應の完結を見るものどが

ある。⁽⁵⁾前者に於ける認めると云ふ作用は已に一種の對應的活動と云はる可きものであるが、後者に於けるが如く單に認められるに止らず對應的なる反作用、應答を見出すことによつて發展せしめられ滿たされることをも含むものに於て、社會的なる心的作用は最も完全に現はれると考へられるであらう。故に非社會的性質の心的作用は何等外的作用に表はれる答を得ず又何等之を期待せぬと云ふ特質を有つが、社會的作用は答を期待し之を見出す事の特質とすると云ひ得ると思ふ。即ち社會的作用に對しては全然我とは異なる所の、而して我が汝と呼ぶ所の、同様に一つの自我なる中心から出て來る、他の一つの作用が來り會する。我が汝に向ける作用と汝が我に投げ掛ける答との、此の二つは偶然に相會するのではなくして、相互に他を要求し合ひ豫想し合ひ補充し合つて、一つの相互作用に織りなされるのである。我が或る事をなし汝が之に對應する他の事をなす、この相互作用が即ち凡ての社會生活の要素的事實である。此の相互に對應せる、對をなせる作用が、相集つて社會的狀態を構成する根本的素材である。⁽⁶⁾斯く社會的作用は相手の作用を豫想し要求し之に準據しつゝ營まれ發展するものに於て、その十分なる姿を見る事が出來ると考へられるが故に、意識活動より出でゝ意識活動を喚び起す此の過程を、之に對する心の用意、

即ち社會關係を背景としつゝ考察して見度いと思ふ。各人自己にとつて何等か實質的に定まつたる、或は彼を個人的に動かしたつゝある生内容があつて、之が活動して相互影響の形態を執るに及び、此の影響が一人から他人へ——直接又は間接に——及ぶ時に、人間の單なる空間的並立又は時間的前後より一つの社會が生ずると云ふジメルの言葉が、餘りに原子論的な立場に立つものではあるまいかと云ふ議論には今觸れない。更らにまた斯る言葉は社會或は社會關係を相互作用の派生的結果となす傾きがあると云ふ發生論的議論にも立入らず、只兩者の間に相關々係のあることを認め、社會關係を顧慮しつゝ、一人の心の中に働きつゝある生内容が他人の心に傳はり、應答を見出すことによつて成立つ相互作用の過程を分析して見度いと思ふ迄である。



斯る心的相互作用に就ては如何にして一人の心的活動が他人の心的活動に影響し得るか、如何にして一人が他人の心を知る事が出来るかと云ふ事が先づ問題となる。之を解かんとして唱へ出された類推説、感情移入説、他我知覺説等を此處に詳述

することは略す。但し此等諸説を注意するに、それ等が問題として居る内的過程と云ふのは、主として怒り、悲しみ、友愛等の感情又は情緒である。併しながら、怒りや悲しみは何事かについての怒りや悲しみでなければならぬ。従て、單に喜怒の情を把握したのみでは他人の心の認知を完くしたとは云はれないであらう。相互作用を營む心的活動は、志向的作用であり志向する意味を有つ。斯る意味と情意とは全き心的實在、心の生命ある作用と活動との内容の二つの契機である。只志向的意味内容が一人より他人に傳はることは何人も疑はざる所なる故特に情意の傳はる事が問題とされたのである。意識内容の傳達について此の二者を區別することの重要性を最も早く指摘したのはジンメルであると思ふ。彼は云ふ、只一定の意識内容を他の意識の中に所謂機械的に投込むこと (mechanisches Hineinschütten) のみが問題である如き場合に於ては、勿論言語は電報的様式で十分事足りる。併しながら、話の目的は——口頭を以てするも文書を以てするも同様に——喚び起された表象と喚び起さる可き表象との間の内容の同一性以外に、猶聞く人の心の動きを要求するのが常である。之は前者と同様に論理的な仕方で強制的に喚び起すことは出來ず、純粹なる當體的内容の再現より更らに高度に、聞く人の心の自發性から生れて來るもので

ある。彼は聞かれる事柄を必ず一定の氣分に於て心に取入れねばならぬ。而して此の氣分は彼の心に刻み込まれるか、然らざれば僅か一瞬の間でも彼の中に停らねばならぬ。彼は讃同確信實踐的歸結を結びつける事等の特定の反應に持ち來されねばならぬ——此等凡てのことは單なる内容のみからは論理的に嚴密に生じて來るものではなく、一つの新たななる而してより廣きものとして、大部分はその内容が提供される形式に依屬せるものである。今若し音樂と云ふ概念を極めて廣い意味に解し、表出のリズム、即ち概念的に固定し得るものを超えて行く所の感情の振動、或は我等の把捉力にとつて最も好都合なる心の表示の時間的動的なる秩序、言葉と概念では單に斷片的にそして恰も寄せ集めの傳へられるに過ぎない所の心的狀態の端的にして連續的なる傳達、として解するすならば——之を我等の表出の音樂と解するならばそれはその表出の持つ實際的合目的性によつて不斷に要求されるものである⁽⁸⁾。此のジンメルという言葉に於て、表象の内容、論理的な仕方で強制的に呼び起し得る所の概念的に固定せしめ得るもの、論理的に嚴密に生じ來る所の内容純粹なる當體的内容等と云はれる所のは、先に志向的意味内容と呼んだものであつて、感情移入説等に於ては全く問題とされなかつた意識内容である。此等の説が特に間

題としたのは、此處に氣分、概念的に固定され得可きものを超えて行く所の感情の振動等の言葉で云ひ表はされたものである。心の活動が持つ所の、廣い意味に於いての意味内容とは此の兩者を併せたものであつて、此の二者の區別に立脚しつゝ、心的相互作用の過程を分析して行く事が可能でなければならぬ。

ジンメルの語が既に示して居る如くに、單に内容又は意味と云へば、通常概念的に固定せしめられるもの、即ちかの當體の意味内容を指すので、あるが、之は心的世界の客觀的事實、客觀的側面を表はすものであつて、我々が知識と云ひ認識と呼ぶのは即ち之である。ジンメルが、認識の興味に於て、我等は心的過程の内容概念的意味を一つの單に動的なる事象としての此の過程から分離せしめる、斯る内容は論理的に之を表現することが出來るとか、歴史認識の素材の一つとしての體驗の純粹に當體的超時間的な意味とか、更らに又我等が概念を以て表現し得るが如き、それ自身已に生の彼岸に屬するものとか云ふものは、凡て此の意味内容としての客觀的當體の意味内容を指すものであらふ。⁽⁹⁾ 對象の要求と之を承認せんとする自我との交渉に於て、直觀内容の有する内面的關係を對象の關係に組織する過程が思惟であり斯くて組

織されたものが認識又は知識であるとされるのであるが、斯る知識、詳言すれば即ち對象の聯關より成り何等かの事態を示す意味は、所謂對象の超越性、自立性——即ち、對象の要求は如何なる時も各人に對して同様に妥當し従つて對象は自我に、又自我の意識に、斯くて又凡ての意識に、全然別異なるもの、全く他の世界に屬するものとして對立すると云はれる如く、全然我等の主觀作用を超越して、或る主觀が之を意識すると否とは對象自身には何等の關係もないと云ふ對象の性質——に應じて個人の主觀的意識を離れてその理解作用を俟たずして自存するもの、純客觀的なるものと考へねばならない。従て同一の對象界を思惟する限り、思惟する自我は同一である。此處には此の個人我、彼の個人我はなく、個性から自由なる超個人的な唯一の認識我又は理性我があるのみである、と云ふ言葉は、知的な客觀的、對象の意味内容の普遍性をよく示すものであると思ふ。客觀的意味内容は、斯る超越性、自立性、普遍性の故に、其を抱いて居る具體的現實的心的活動の實相、その特殊なる調子や色合ひには顧慮することなく把捉し得られるものであり、同一の客觀的意味内容は全く別異なる心的状態によつて把持される事も亦可能である。また其れは、只自己に特有にして他の如何なる體驗にも屬せざる、強さ新鮮さ又生氣等をもてる具體な心的活動

の流れから取出し何等の變化をも加へる事なしに他の體驗に移し入れる事も出来る。其は原理的に云へば、如何なる思惟者にも到達し得るものであつて、各體驗が普遍性の意識を以て營まれるは此の契機あるによる。此の契機のみを取出して見れば、それは我等から全然解き離された對象性をもつて對立し來るものであつて、斯る意味内容の一角が私の個人的體驗内に構成されたとしても、原理的にはあらゆる思惟主體が私に代つてそれを同様に構成する事が出来る可きである。

斯く自己同一を保つて恰も凝固したかの如く生の彼岸に自己の存在を有する如き、純粹に當體的なる客觀的意味内容の超越性と内在性とは如何にして可能であるか、と云ふ問題には、今は立入ることなく此處では只、斯る性質ある意味内容が我等の心的活動の契機として存在する事を認めるに止める。而して單なる知的客觀的内容の聯關は決して完全な心の實相ではなく、その對象的側面に過ぎない。従て完全な心的現實態の全體ではなく、正しく解すればその一半である。斯くて他の一半が次に問はれなければならぬ。⁽¹¹⁾

斯る殘されたる一半とは曩にジンメルが、概念的に固定し得られるものを超えて

行く所の感情の振動とか気分とか云つたものである。如何にして他人の心を知り得るか云ふ問題に於て主として論せられたのも、意識内容の此の部分であり、それが問題とされたのは斯る内容の持つ主觀性の故である。何等かの意味で對象化し限定し得るものは曩の知的内容となる、之に反し、如何なる意味に於ても對象化することの出来ない剩餘が感情であると考へることが出来る。感情とは、直接體驗された自我の状態の意識である。感情はその主觀的なるを以て客觀的なる感覺や知的内容と區別せられる、兩者を區別す可き本質的特質は此の主觀的と云ふ一語にある。而して心理學者が情緒なる語を以て表はす如く、感情と意志とは同一方向の精神現象であると考へることが出来るであらう。故に残されたる一半の内容は之を一括して情意的内容と呼ぶことが出来るやう。斯る情意的内容は自我の性質、状態、態度であるが故に、注意を向ければ向ける程明かとなる知識と反對に、注意を向ければ反つて消滅する。従て之を概念的には把握し云ひ表はすことは全然出来ないか、又は頗る不完全にしか出来ない。科學的概念的に媒介されたる認識の形式中に入れることの出来ないもの、一般に單なる知識にとつては到達し得ざるものである。あらゆる個性的な多様性の彼岸に立つ一般的概念のみを取扱ふとは、形式的に見て、知識

がその本質に從てなす働きを適切に言ひ表すものであらうが、斯る知識の立場に於いて限定把握す可らざる、心的活動の眞に個性的なるものが情意的内容である。情意には一樣と云ふ意味に於て一般性を容れる可き餘地はない。何等かの意味で一般的なるものを假定すればそれは已に知識の立場に墮する。情意に於ては、一々が創造的であり一々が個性的でなければならぬ。斯る情意的内容が即ち人格的統一の内容である。人格とは單なる概念的固定的なるものを内容とするものではなくして、具體的動的なるものを内容とするものである。情意とは此の人心の奥深く潜める動く或る物である。愛も喜びも共に自我の根柢より動く一つの働きである。之は對象化し客觀化せんとすれば、已に感せられ又は體驗されるものとしてのそれ自らではなくなり、不明瞭なる類型的概念に墮し、斯る概念的思惟の反省の立場を経ずして *mitwollen und fühlen* される時、直ちに心から心へ傳はるものである。⁽¹²⁾

我等の心的活動又は體驗の内容は、右の如き情意的主觀的なるものと知的客觀的なるものとの二つに分つことが出来るであらふ。シュタインが意味體驗に於て意味中核 (*Sinneskern*) と體驗の外核 (*Erlebnishülle*) とを分ち、前者を本來思惟の對象として

我等に對立し來る觀念的意味統一體とし、後者を斯る意味複合體を包んで表はれしめる所の主體に屬するものとしたのも、右の如き區別に相當すると思ふ。⁽¹⁰⁾ 凡て通常精神活動と云はれるものは思惟作用を豫想し之と共に始まる。凡て此等は意識的に對象に關係づけられて居る。即ち根源的に對象的意味内容が主觀の心を捉へて居る。精神狀態全體の中に客觀的側面として含まれて居る。併しながら、之は飽く迄一半たるに過ぎない。「我等は我等の思想を只それが意味する所のもの、そのそれ自身力無き觀念的内容のみに於て見ることに餘りに馴れ過ぎて居るが、大切なるは他の半面即ち動的にして實在的なる内容である。前者は只これの指標又は象徴である。我等の思想體驗は、概念を以て表現し得る如きものゝみを意味せず、反つてレアールな生のレアールな脈搏である」と云ふジンメルの言葉に於ける動的にして實在的なる内容と云ふは右の區別より見れば、觀念的内容と情意的内容を併せたる心的活動の全内容を意味す可きである。⁽¹¹⁾

(74)

以上述べたる如き内容ある心的活動が意識より出て意識に至り此處に應答を見

出す過程を之より究めんとするのであるが、考察を單純ならしめる爲めに相互作用相互影響の特殊なるものを先に考察し、それより一般的考察に入ることゝしたい。斯る特殊なる過程の第一はシェーラー等によつて説かれる所の感情傳染 (Gefühlsansteckung) である。これは恰も陰鬱なる自然の中にあるときは人の氣分も之に化せられて自ら陰鬱になると同様に、只他我の心の情意的内容のみが傳はり、しかもそれが何處より來るかゝ意識されずして、自己自身のものであると思はれる場合である。純なる感情傳染に於ては、他我から傳はり來る感情は、他我のものとして與へられず、自我のものとして與へられ——而してその因果的な由來のみか他我の體驗に迄溯て行くに過ぎない。例へば人が自己の中に見出す悲しみの情は、彼が少時前に訪れた會合から受けた感染にもとづくのであると云ふことは、後から漸く認めるに過ぎなくて、此の悲しみそのものには、斯る由來を指示する何物も存在せず、推定と因果的熟考によつて、初めて何處から生じ來つたかゝ明かになるが如きは即ち之である。斯る時は他我の喜悲に對する感情の志向もなければ、彼の體驗への何等の配與も成立せぬ。むしろ感情傳染には、それが全く感情状態の間に於てのみ起ると云ふこと、而して更らに他我の喜悲について知ることを一般に豫想せぬと云ふこと、即ち相互の理

解が全く缺けて居ると云ふことが特色である。此處に於ては、對象的、知的意味内容が傳へられ、之に於ての相互作用が行はれないのみならず、所謂志向的存在間隔 (intentionale Daseinsdistanz) 又は現象的的自我間隔 (phänomenale Ichdistanz) が存在しない。即ち意識に於ける自我と他我との區別は相互に全く存在しない。⁽¹⁵⁾ 故に此處にも客觀的に見るとき相互影響は存在するが、相互の心的活動が互ひに他を豫想し要求し補充し合ひつゝ、發展する相互作用の過程から見れば、斯る過程は特殊にして逸脫的なるものと見らる可きであらふ。

感情傳染と同様に意識に於ける自他の區別を缺くれば、單に感情的内容のみが傳はるのみでなく、對象的當體の意味の内容まで其の儘傳はり、働きかける特殊な過程がある。之を一體感 (Einstimmung) と云ふ。之に於ては自我と他我とが同一化され、他我が全く自我の中に入り、斯くて自我は自らの中に生きずして、全く彼に於て、彼を透しき生きる。自我は最早や自己自身の生活を營まず正さに彼の生活を營むのである。自我は他我の情緒の動きと關心の範圍に引入られたとも云ふ可き有様であつて、自我の生活はその時の他我の生活の把握によつて初めて與へられる所の内容への多様な反應に存し、従つて眞に他我に關することが自己自身に關する如くで

あり、此の生活を事實上仲介する他我の生活の把握そのものは全く自我によつて意識されない。此の一體感の働くは、シェーラーの説くが如き自我の生命中枢なる本能情緒の層のみが自由になる場合なりや否やは問はず、一人の心的活動の内容の方面が其の儘他人の心的活動を支配し、しかも自他の區別が意識されることなく、両者が同一化されて居る場合のあることに注意するに止める。感情傳染や一體感は、暗示作用、また群棲動物、原始民族、群衆等に於ける相互作用に於ては重要なものであるが、心的相互作用の通常の過程より見れば、特殊なるもの故、此處にはこれ以上之に立入ることをしない。¹⁶⁾

感情傳染と異り自我相互の現象的なる間隔は存在しつゝ、主觀的情意的内容のみが傳はるに過ぎぬ場合もある。心的活動の對象的知的情意内容が明瞭に分化形成されず、情意的側面のみ形成されまた働く他我との交渉は之である。或る人に於て瞬間的衝動によつて激情が迸出する時、その音聲や身振を見また聞く人は、怒りまたは怖れ等の情意についての印象を受けると共に彼が怒り又は怖れるのであると云ふ意識は此の印象の意識を貫いて、その指數として隨伴する。併しながらその怒り又は怖れの原因について、また彼が斯る動作に於て要求する所を捉捉する能はざ

るは、精神發達の初階段にある嬰兒の、精神的活動無きかまたは乏しき故、客觀的知的意味内容が散漫にして明確な形を執らず固定性なき心を汲み其の要求を満し難いのと等しい。此等の場合は、表現する人の心的活動に對象的主味内容が明確に成立せざる特殊な場合であるが、把捉し理解する人の心が對象的意味内容を形成し得ざる場合もある。未だ精神的眼の開かざる幼子は、泣いて語る母の言葉の當體の意味を解しない、只涙を歎きの表現として解するのみである。凡て此等の場合は、心的活動の一面の缺けたる特殊な場合であるが故に、相互作用の過程の一般的考察に於ては此等に顧慮を拂はないこととする^{〇(17)}

相互作用の内容が情意的なるものに限られる特殊なる場合の考察は、社會關係の考察と密接に關係ある右の如き場合及び、志向的存在間隔を缺く場合の考察のみに止め次に一般的考察に入る。

(五)

社會化されたる人間の心的活動の内容は通常先に述べたる如き二様の意味を有つのであるが、斯る心的活動が相互作用を行はんが爲めには、先づそれが何等かの仕

方で表現されることを要する。神人の交通に於ける黙禱と異り、社會心理的相互作用に於て、一人の心が他人に傳はり之に働きかけ得る爲めには、それが一定の感性界、外界の形象に實現され客觀化されることを要する。心の接合從て又相互作用は、斯る感性的形象を一つの契機として持ち、此の物的基礎の上にのみ初めて可能であるが故に、斯る感性界への表現は相互作用に於ては、偶然的に附加はるものではなくして、缺く可らざる一要素である。

此の表現形象の成立內的活動表出の仕方には種々なる區別が考へられる。最も直接的端的なる表現に於ては、生ける具體的なる心的活動が自發自展して自ら明かなる表現形象を執る。此の時、心的活動の意味内容全體を表はし傳ふ可き手段としての物的なるもの、即ち感性的形象は、心的活動と內面的統一をなし、心的活動の完成者として兩者の間に些かの間隙もなき特異なる關係をなす。單に相互作用に於てのみならず、凡て自我の純なる動的内容は自ら表現を伴ひ來らねばならぬ。自我活動の状態としての情意は、表現運動に於て自らを明かにし發展せしめる。心的活動の發展が伴ひ來る所のかの特殊なる生動と充溢と分化とは、若しも表出に於ける流露を斷念せざる可らざる場合には到達すること能はざる高みに、その心的活動を上

せるものであり、身體的表示への流出を缺く體驗は、それを持つ場合に成り得るものとは別異なる、貧弱卑矮にして内容なきものとなる。客觀的形象が體驗の懷から出て外的世界に、自己自身の存在を與へられる時に、體驗は自己の完成を受けるのである。精神はそれの顯現するに先立つて既に完成されて現象の背後に在るものではなくして、自らの必然的なる自己啓示の一定の形態によつてのみ眞に現實的となるものである。勿論心的活動の無限なる個性的豊富を現はすには、斯る外的形象は之を如何に分化せしめ纖細ならしめるとも不十分である。Spricht die Seele, so spricht, ach, schon die Seele nicht mehr!¹云ふ歎きは此の不十分性に對する啣ちであらふ。併しながら、心的活動が自らを宿す感性的形態の此の不十分性と戦ひつゝ之を征服して、外界に自らを注ぎ出す時執る形象は、單なる圖形や符號、蔽ひではなく、まして非現實的な寫象や僞瞞的假象に非ずして内生の志向の成就であり、正さにその中に投せられたる意味内容と合體融合し、自我がその中に脈打つて居る。此の時は、凡て、心的活動をしてそれに特殊なるニュアンスを有たしめるもの、即ち特異なる人格的統一としての情意が表現形象をその最後の脈絡中に迄行き互つて支配する¹⁵⁾。斯るレアーナルなる表現に於ては、原初の心的活動の持つ内容の兩面が、其の儘發展

せしめられ生けるが儘に表はされるのであつて、相互作用に於て斯る表現の行はれる時は、表現形象はその主體の心的状態について、直接の十分なる告示を與へ、ワルターの云ふが如く「主體は相手に向つて感情の波に運ばれて行く」と云はれるであらふ。但し此處に直接的表現と云ふは或る人々が表現運動 (Ausdrucksbewegung) と呼ぶ所の只情意的意味のみを含み表すものを指すのではなく、情意と共に之に包まれたる知的對象の意味内容をも表示するものを指す。

併しながら社會的相互作用に於ける表現は、凡て斯る端的にして十分なる表現であらふか？ 心的活動は凡て十分なる表現に至るのではなく中途にして消滅し、別異なる活動、思惟によつて抑壓されるものもある。相互作用に於ても之が直接端的なる表現に發展するのは、特殊な社會關係心の用意を地盤とし背景として、いはあるまいか？ シェーラーの云ふ如く、人格と精神とに於ては、自己を顯示し自己を認めしめるか否かは、自己の自由なる裁量に屬する。人格はまさに——沈黙し、自己の考へを無言の中に葬ることも出来る。而して、之は單に口に出さないとは全く別異なる事柄である。それは一つの能動的な態度であつて、人格は自己の心的状態を、之に對して起るあらゆる認識に向つて任意の度合に於て蔽ひ隠すことが出来る。⁽²⁰⁾ 斯る抑壓や

規定が起らず直接なる表現の行れるのは主として次の如き場合でなければならぬ。即ち主觀的に感せられたる其屬性(31)が存し各人共に相互作用に素朴に身を捧げ心を開く所に於て、又我は他と共に一つの全體に結合されて居ると云ふ不可還元的な意識即ち「我等意識」の上に立ち、自我が擴大されて團體全體に及び、*Fürsichseinwollen* が無くなつて信賴・安泰・協和等から流れ出る打寬いだ感じに於て相互が結合されて居る所(32)換言すれば所謂共同社會的關係に於て、*あつて*、此の關係を背景又は地盤としてこそ、心的活動は豊かなる情意的内容も其の儘に浮び出る自らなる表現をなして他人に向ひ、又認められるであらふ。

抑も情緒と表現・體驗と運動との間には因果の糸は存在せず、兩者は、同一活動の内容と現象・象徴と意味であると云ふ内密なる關係によつて、原初に於て相合して一全體をなして居ることは多くの人々によつて説かれる所である。即ち表現運動は心的活動から獨立したる、之への外的附加物と考へらる可きものでなく、従つて、先づ心的活動が最初に知覺意識され、然る後に能動的なる接合によつて、表現への傾向とその運動とが成立すると云ふ如く、兩者を分離し、直線上の繼續的位置に並立せしめ、その間に因果的相互關係を考へるのは、偏局せる原子論的立場に立つものと云はねば

ならないであらう。併しながら心的活動の流れの分化と發展には、種々なる段階と方向とが可能であり、之を規定するものとして社會關係心の用意は、相互作用に於ては最も重要な働きをなすものであると思ふ。

之に反して利益社會的關係——即ち、合理的思惟が設けたる條規によつて各人が結合され、各人は飽く迄個人人として止り、相互の融合なき分離状態にあつて、常に自己の利を顧慮し、斯る利と條規との反省顧慮を経てのみ相手に應じまた働きかけんとする關係——に於ては、心的活動は自發身發して表現に至るに非ずして、合理的思惟の反省によつて支配され中斷されねばならぬ。嚴密に云ふならば心の活動や表現を包む一次的な體驗全體の流れの中に斯る思惟も浮び出て來るものであらうが、意識發展に於ける思惟の働きを見れば、一方我に於ける體驗の存在と、他方體驗の我に對しての存在との此の兩者は、何時も時間的に分離する。從て私が自己を考へるならば、考へられたる自己はそれを私が考へる丁度其の瞬間に屬することは出來ない。換言すれば、考へる自己が屬する所の其の瞬間に屬することは出來ない⁽²³⁾と云ふ如く、心的活動は之を反省し中斷してその表現を思惟的に規定せんとするときには、心的活動は認識の對象界に墮し直接體驗されたる自我の状態としての主觀的なる情

意的意味は純なる内容を失つて不明瞭なる類型的靜的なるものに墮す。斯くして原初の心的活動は萎靡して自發自展的自己展示は脱落し去る。

直接的表現に於ては自我は自己を何等留保する所なく表現形象の中に投じ、従つて之を介して端的なる自他の接合が可能であるに反し、機械的反省的表現に於ては、全體の過程が云はゞ分裂し、諸段階に區劃され、情主的内容は其の生命を失つて、表現に至つて自己の明瞭なる完成に到達することなくして消え去るが故に、斯る表現が内的活動に忠實なるものであるとしても、それが十分に表示し得るのは、只客觀的對象的當體の意味内容のみである。従てそれは固定した生命なき意味を盛る器に過ぎず、眞の具體的個性的なる心的活動からは全く獨立せる、當體的なるものを指示するもの、心の實相にかゝわる所なき一般的なる、單に技巧的に用ひられる道具たるに過ぎないとも云はれ得る。従て深い意味に於ける象徴たり得ず、心の實相と表現形象との間の聯關の不完全性は、斯る表現には避く可らざるものである。斯る表現形象を透して心の實相を推定せんとすれば、正反對なる推定も許され、眞實にして確實なる實相に至り得ざる事は、之に表示されたる意味内容の本性よりして必然である。テンニイスに於ては商人が選擇意志の主體の典型的なるものであり、萬人が萬人に

對して商人なる社會が利益社會の究極の概念をなして居る。從て相互關係は潜在的鬭爭の關係である。シユタウディングに於ても同様に、利益社會的關係にあつては、各人は自利を追ふ可き鐵鎖に縛られたる如く、主我的自由競争が此の社會の本質的核心をなす故、相互は狡知と暴力とを以て交り、互ひに欺き詐つて利を收めんとする關係にある。⁽²⁴⁾ 即ち、欺瞞に對する心の用意が斯る關係の中心をなすと見らる可きが故に、此處に於ては單に情意的意味内容を脱落せしめるのみならず、内實の心を蔽ひ隠さんとする如き表現形象を執らんとする心的活動が不斷に意識の背後にあつて表現を支配するのは頗る當然の事である。斯くて成立する表現形象は虚偽の形象であり、其の中に情意的分子が含まれるとしても、其は勿論装はれ飾られたるものに過ぎず、何等生の直接性の籠れるものではない。心の原初の實相と、それを表示す可き表現との間の紐帶は、兩意味内容に互つて引裂かれ、原初の對他的心的活動の要求する一定の表現形象とは別異なるものが代置され、心にもあらぬ自己呈示によつて、眞實なる自我の状態とは親縁なき形象が表にせられる。此の時人は自己が呈示する形象の外に、いつも猶之を左右して居るものは自分であると云ふことを感じて居る。彼は自己の自我意識を決して失はず、自我及び彼れの眞實なる自我體驗と、

此の形象との間を振子の如く往來して居るのみである。斯る形象を透して彼の本來の實相を把握せせん事は最も期し難いと云はねばならぬ。

(六)

社會心理的相互作用は、感性的形象を契機とし基として行はれるものであり、此の故に表現が相互作用の一要素をなすのであるが、斯る契機としての感性的形象は單なる物的なるものではなくして、精神的なるもの、意味と結合したものでなければならぬ。意味を荷ひ之を展示する機能を負へるものでなければならぬ。換言すれば意味によつて精神を與へられ *Beseelen* せられたるもの、意味の物的世界に於ける出現でなければならぬ。斯る意味は命令であり願望であり又事實でもあり得る。その對象は實在するものであることもあり又想像的なるものであることでもある。或る形象が正さに此のことを意味して他のことを意味せぬと云ふ事も、或は一時的の協定でありまた幾百年も古くからの傳承であり、或はその場合の爲めに意識的に作られた理解の手段であり、又は血肉に化した慣習であることもある。或る形象の意味は直接洞見され、他の形象のそれは習得されねばならぬ。或る場合には感性的

形象を作り出す人の側に理解されんとする明瞭なる意圖があり、他の場合には心的活動が無意識的に一定の表現に現はれ、只仲間の直接の共感 (Mitscheln) によつて正しく解明される。此等凡ての場合、感性形象と意味との間には何時も前者が後者を意味し、前者に於て後者が理解されると云ふ象徴的又は符號的關係が存在する。斯る表現形象としての意味をもてる形象には、身體に結合されたものと、之から解き放されたものがある。後者は成立の過程と直接結合されて居らず、之を生せしめた人間に對立し之から獨立である。故に之が有つ意味は、之を成立せしめる時の感情の狀態等に就ては語る事が前者よりも少い。けれ共それも精神過程の最後の分肢であるが故に、猶心的活動の内容をなせる兩種の意味を有つて居る。即ち具體的なる行爲に就て當嵌まることは又主體を離れた形象にも當て嵌まり、之を透して、之を生せしめ、又は之を扱つた人の心の姿が窺はれ得る。彼の人間性の微光、その瞬間の心の狀態の殘映が之に現はれて居る。形象は各その作り出された時の心的生活の全體性によつて規定され、従つて斯る全體の姿を表現して居る。形象成立の過程より見る時は、直接端的なる表現形象が最もよく心の全き實相を示すこと勿論であるが機械的表現に於ても隨意的反省の故に、情意的意味内容は消失し、此の意味の側よ

りすれば無記なる形象となると云はなければならぬが、所謂意識的意欲と稱するものも、個性的特質によつて染めつけられ、又全過程に於て意識に監理され切るものは極限に過ぎない⁽²⁵⁾が故に、斯る表現も之と結合せる心の動きの兩面を語るであらふ。又装はれたる表現に於ては、心の眞實なる情意的内容が自ら浮び出でることはないが、猶装ひが成立し得るのは意味と形象との、一定の經驗的共屬性とも云ふ可きものを根據として何等かの情意的意味内容が外面的に形象に結合されることによるのである。斯る形象には生ける情緒は籠らず、原初の對他的な心の實相は表示されない。併しながらこの眞の意味に於ては表現形象と云ふ可らざるものにも、一般的經驗的に之と結合され易き意味を附着せしめられることによつて、之も亦 *baseien* されたものとして把捉されんことを要求する。生表現による象徴關係に基いた表現價値は有ないが、しかも猶意味あるものとして存在すると云はねばならない。斯くて、表現の仕方の如何にかゝわらず、凡ての表現形象は多小の相違はあるも心的活動の意味内容の兩種類を有つと云はれ得ると思ふ。

意味精神内容を有つた物的素材と、積極的に作用する理解の心との心理的交渉は、廣汎にして深い基礎を持つた心理學的研究によつてのみ解かる可き問題である。

何となれば之は我等が文化財に能動的受働的、又意識的に關係づけられた時のあらゆる働き方の心理學なるが故に。精神の原始的發達階段に關しては此の方面に於て民族心理學が已に重要な成果を擧げて居るが、高等なる文化階段に於ける此の方面の研究は今後の開拓を待つ一領域として殘されて居る。今此處では斯る場合の一部なる、社會心理的相互作用の一要素としての表現形象の理解を考察するに止めねばならない。表現の感性形象を透して他人の心を知る過程の心理學的分析について見れば、類推説にも猶幾多の眞理があるであらふ。⁽²⁶⁾又リツプスが他人の身體の感性的現象に於ける過程と變化との知覺並びに把捉に於て、直接に、我等が例へば怒り又は親しみ、悲しみ等と名附ける如き或るものを同時に把捉すると云つて、感性知覺と感情の把捉とは一つの分つ可らざる作用として、只一つの體驗中に合一されて居ると説きつゝも猶、此の體驗の過程を説明せんとするに當つては、右の兩作用及び自我と他我とを峻別し、模倣と表出との二本能の作用によつて構成的に説かんとしたの⁽²⁷⁾は原子論的立場に立つと云はなければなるまい。此の點に於て物と心、我と他我との區別の前に、凡てを根原的に包括せる體驗の大なる流れが、原初的に原本的な知覺と云ふ意味で直接に與へられ、それが内的知覺の方面に發展して漸く自他の別

を生じ、他我の心の知識も成立するとなすシエーラーの全體的立場がより正しいものであるとなす可きであらふ。

併しながら、此處には他人の心を知ることが如何にして可能なるかの根本的考察は試みず、此の知り方に如何なる類型があるかを究めねばならない。而して之を究めるに當つても亦シンメルから出發するのが便利である。シンメルは理解を次の様に論じて居る。「理解と云ふ時その第一のことは、明かに、他人の意識作用が我等の内に nachbilden されること、世に云ふ自己を他人の心の中に移し入れ得んことである。云はれたる命題の理解とは、正さにそれによつて云ふ人の心の働きが聞く人中に惹き起される事を意味する。本質的な差異が兩人の表象の間に生ずるや否や、一人から他人に行く言葉は、誤解されたか又は理解されないかである。斯る直接の Nachbilden は併しながら只理論的思惟内容のみを問題とする時に限られ、此の時にのみ不足なく行はれる。斯る内容に於ては、それが表象として正さに此の個人から出ると云ふことは本質的なことではなくして、反て寧ろそれが當體的な内容を論理的形式に於て各人に同様に提供すると云ふことが本質的なのである。客觀的認識に於て私が認識の對象に對して執る態度は、丁度或る人の此の對象に就ての表象を私

が理解する際のその人の態度と嚴密に同様である。彼は只その表象の内容を傳へるに過ぎず、その後は云はゞ再び *aussprechen* される——内容はそれ以後私の思惟の中に、彼の内容と平行に、そして彼から源由せる事による屈折又は變容の跡をつけられる事なしに確保される。此の場合に於ては、私が話す人を理解すると云ふ云ひ方は完全に事態に當て篋まるものではない。何となれば本來話す人を理解するのではなくて、話された事柄を理解するのであるから。併し彼が個人的な意圖によつて、先入見、又苛しさによつて、又憂悞の念、嘲笑の情によつて、言表に驅られる時は事情は異なる。我等は此の言表の動因を認識する時、その當體的内容の把握によることは全く異つた意味に於て理解を行つたのである。此の時初めて云はれる事柄に非ずして語る人に關係するのである。歴史的人物を問題とするのは正さに此の理解である。歴史心理的意味に於ける *Nachleben* は決して史的人物の意識内容其の儘の繰返しでないことは論を俟たない。併し我等は彼れの愛と憎しみ、勇氣と絶望、意欲と感情とのあらゆる種類及びあらゆる度合を理解せんことを主張する⁽²³⁾。此處にジンメルは理解を二種に分つて居る。當體的内容の論理的なる形式に於ける把握話されたる事柄の理解、事態の把握と云ふが如きは、即ち、客觀的對象的意味内容のみに着目

し、之のみを把握する仕方であつて、客観的理解と云ふ言葉はよく斯る性質を示して居ると思ふ。之に反し、歴史的理解と云ふは、情緒のあらゆる度合の理解、話す人の理解、認識されたるものゝみを認識するに非ずして意欲され感せられたるものをも把握することを云ふ。即ち之は、心的活動の有つ意味の二層を其の儘併せて *nachhören* することではなければならぬ。

單なる當體的内容のみに關心せず、相手の人、相手の心そのものに自分の心が關係づけられそれを汲まんとする時に初めて歴史的理解は行はれる。此の眞實なる具體的なる心の働きの理解に於ては知覺形象を透して、其の中に存する心の實相が示される。人格的關與ある相互作用は此の上のみ可能である。之は情意的意味内容のみの把握なる反知的な理解ではなくして、知的客観的意味内容をも併せ把握する包知的な理解である。客観的當體の意味内容は心の傳達に於て結合因子 (*Bindungsfakt*) として作用するものであつて、之が理解されねばならぬことは勿論であるが、今此處に大切なるは單なる事態の把握ではなくして、表現者の内面世界である。之は表現形體の當體的なる理解を豫想するが、同時に、明かにその對象的意味を越えて之を包めるより廣き情意的意味を含むものである。リツプスの云ふ如く概念的 *Wiss*

sein 16. rechtes Wissen ではない。完全なる Was oder Wesen は之に於いては把握されな
 べし。

「我々は何時でも知識によつて互ひに理解するのではない。知識によつてのみ我々は結合せられるのではない。我々は知識によつて説明の出来ない多くのものを有つ。我々は多くの概念なき理解を有つ。リツプスの語を藉りて云へば我々は感情移入による理解を有つ。而して知的理解の根柢にも一種の感情移入があると考へることが出来るのである」⁽²⁹⁾と云ふ時概念なき理解とは反知的理解に非ずして、反省的思惟の對象界に下り來らざる直下端的の理解であり、感情移入とは具體的動的なる主觀態 (Subjektivität) の把握であらふ。斯る主觀態の認識は情意的内容迄 anschaulich になつた時始めて滿されるものである。リットは斯る理解を Verstehen von Tiefgang od. Verstehen im tieferen Sinne といつた。ウエーバーが追感的理解又は künstlich rezeptives Verstehen といつたのも斯る理解に相當すると思ふ。

凡そ斯る理解の行はれるは、各人が相手の心情そのものを第一次的對象として結合されて居る場合であり、従つて隔てなき共屬の感情に於て内面的に結合されたる共同社會的關係が最も多く斯る理解を成立せしむ可き高度の蓋然性を持つと云は

ねばならない。勿論體驗内容を汲むに當つて確實性、透入性には種々の度合がある。眞に深き理解は相手の未だ明かに意識せざる動機まで洞察せねばならぬ、けれ共利益によらずして愛着により結合されたる共同社會關係にある人々は、常に斯る深い意味に於ける理解を行はんとする態度又は心の用意を有つ可きであり、共同社會的關係が相互作用に十分に働き出でる時は、斯る理解作用を生せしめるであらふ。

客觀的理解は心的現實態の客觀的側面のみを抽象的に把握し他の反面には觸れず省みない。其の極根に於ては情意的意味内容、主觀的狀態が全然傳はらない、即ち他人の心の *fühlerndes Aufnehmen überhaupt* が全く行はれぬ場合が想定される。併し、斯の如きは自己の感情のみに全く没入して他人の感情に無感覺となる結果現はれる病的な場合であるが、⁽³⁰⁾ 事態、當體性のみを重んじ人格的關與なき冷かなる利益社會的關係に於ては、斯る情意消失に近い理解が行はる可き蓋然性が大である。凡そ表現形象の知覺に於ては、心的活動の内容の兩面が等しく與へられるのが根本的事實であらうが、此の客觀的理解に於ては表現形象が表示する心的活動の全内容から、その知的對象の意味のみを取出し、把握せんとする方向に意識が發展し、之のみを單獨に認識せんとする故、心的現實態の極りなきニュアンス、個性的統一を有ちつゝ流動し

行く心的活動の具體相を捉へ得ざるに至る。斯る意味に於て全體としての人間の表はれなる行爲の眞實なる意味に暴力を加へ之を損へる理解である。言語の如きも、それが表はす概念的に一定した語義に於て解するに止るならば單に云はれたる事柄の理解に止り、之を發した人の心的状態、それに包まれたる動機の如きに透徹することの出来ないのはジンメルが先の言葉に於ても述べた所である。斯くて客觀的的理解は、心的活動の全體相に顧慮することなく、その骨組みとしての當體性のみを見るものであつて、人間相互の情意相觸れる交りを妨害するものであり、此の相手は當體的に規定された行爲の、特質なき遂行者たるのみであつて、體驗の根柢から解き離された客觀的に一定した意味の聯關に於てのみ、思考し行爲する抽象化された人間となる。あらゆる具體性、個性、人格性の脱落し去つた斯る客觀的普遍的にして最も單純なる理解をリットは人格的結合の極限的なる場合として極少量に於ける理解 (minimum des Verstehens) と呼んだ。

極少と云ふは情意内容のみに止らず一般的にして抽象的なる意味内容まで脱落し去つたならば、心の傳達と云ふ作用は無意味になり了るが致に、客觀的理解は相理解に於ける最終の稀薄化と見なければならぬとされるが故であるが、客觀的意味内

容が損はれず傳達されるならば、動機の當體的側面が把捉され、此の側面に於ける共同作用は行はれ得るが故に未だ極少と云ふことは出来ない。理解の困難と障害は當體的側面の把捉まで期し難い場合に於て極まる。我等は全く同一の心的事象に、屢々全く別異なる外的成果の生ずるを見ると共に、又同一の外的事象を頗る多様な時としては相互に反對する心的過程によつて解釋する。複雑高級なる心の過程に對しては理解の不確實と誤とが益々高度の可能性を持つ。斯る誤解は身體から分離したる形象を介する時特に著しいであらふが、その最も甚しいのは、表現に於ける虚偽欺瞞の行はれる場合なる事は論を待たないであらふ。感性形象の知覺に於て直接にそれが持つ意味を汲むと云ふ意味把捉の根本的事實に従つて、我等は涙に於て惱みを見輝ける眼に於て現はれ出たる喜びを感得し、此の惱や喜びを自己から相手に移入したものととして感じないのは明かであるが、必ず直ちに之を相手の心に於ける、實在なるもの眞實なるものとなすであらふか？斯く信せられるのはそれに *innere Zustimmung* ⁽³¹⁾ が與へられ理解作用が眞に生命あるものになる時に於てではなからうか？我等は感性形象に於て認める意味が直ちに相手の心の實相であるといつても信ずるのではない。知覺に於て直接相手の眞實なる心を見たとなし得ず、間接に

推定臆測の道によつて之を察する場合は事實上頗る多い。例へば私が或る人の意圖即ち當體的意味内容と感情とを誤解したか、又は彼が私を欺瞞し詐つたかの何れかであるとの推定に至らしめられることがある。此處に於て事實上私は彼の心に對する推測を行ふ。同様にして相手の表現から彼の思想及び感情を推測する態度を最初から執ることも亦出来る。またその態度は、何處でも、内面的に相手の體驗をあとづけることが何等かの障害に逢ふと氣附く場合、又は一定の積極的な、究極に於て知覺に起因する根據からして、體驗と表現との聯關統一の妥當せざることを、從つて自働的に規定されたか或は故意の分離を、想定することを強いられる場合に執られる。⁽³²⁾ 利益社會に於ける根本的態度は萬人の萬人に對する底知られるが原本的不信 (Grundloses und primäres Misstrauen) 也とするシェーラーに從へば又、互ひに狡知と欺瞞の關係にあるとするシエタウデインガーに從へば潜在鬭争的關係に於ける理解は斯る道を経るものである外はない。而して斯く相手が欺瞞的表現をなすと云ふことは他人からの指示によつて知るに止らず、又直接に、時によつては嘘そのものを、云はゞ嘘の Aktus そのものを知覺することが出来る。此の時我等は感性的形象の意味の把握そのものに於て、その意味が非實在的なる事を意識する。けれども、斯る場合

に於て表現形象が假病者の意志に從て表にせんとするもの、彼が技巧的に一定の昂奮を具體化することによつて、此の表現形象の中に入れんと欲する所のものと、彼の眞實の意圖、情意とを直接感性的状態から推測し區別し出すことは難かしい。斯くて相手が表現形象と眞實の心との間を往來する振子なる事を知る時、形象の示す意味が心に於ける實在性を有たざる事を知る時、原本的な心的活動を理解することは客觀的理解にもまさつて一層困難である。此の場合こそ、理解の極少なる場合と云はなければならぬ。

これまでジンメルが史的理解と云つた所のものと、社會的相互作用に於ける理解とを區別することなく同様に用ひて來たが、兩者は根本的に區別されなければならぬ。歴史的態度又は理解 (*historische Haltung* od. *Verstehen*) に於ては、自我はその儘自我として止りつゝ、他人の表現形象が一つの、自我とは別異なる根本的な態度を、表はして居ることを承知して、而してその意味内容を完全に把握せんとする。而して、本質的に自我自らのものではなくして他人のものなりとの符號を之に附與し、自己の理解は形象に對して全く生關係 (*Lebensbezug*) を設定することなく、只理論的なる仕事であること云ふ附言を本質的に伴はしめて居る。但し此の附言は後から附加したものと

ではなく、歴史的な理解作用そのものゝ特質をなして居るものである。形象の意味を完全に汲み取らんとする點に於て客觀的理解と異り、此の故に追驗 (Nacherteben) 又は藝術的受納理解と呼ばれ得るのであるが、理解が之に止るならばそれは未だ十分なる意味で主觀態を把握せるものと云ふことは出來ない。社會的相互作用に於ける理解の最も究極的なるものは、歴史的な理解より更に一步を進めたものである。此のことを鋭く示すのはシェーラーの追感と共感との區別である。彼は説いて云ふ。

「追感はいまだ認識的態度を脱しない。追驗は大歴史家、小説家、戯曲家が、これを行ふ才能を多分に所有するところのものである。追驗も恐らく他人の感情を感じることであり、決してそれの單なる知や判断に過ぎぬものではないであらふ。然るにもかゝわらず、それは状態としての眞實なる感情の體驗ではない。我等は追感に於て他人の感情の性質を感得的に猶把握する——しかし、それが我等の内に乗り移り來ること、又は同一の眞實な感情が私の内に激發されることはない。此處に於ては、他人の感情の所與性は、我等が追憶の意識に於て見又聞く風景やメロデーの所與性に等しい。追憶に於ても眞に見又聞くけれども、その風景や音律は *wirklich gegenwärtig* なものとしては知覺されない。之れと同様に追感も只他人の状態の性質を與へる

に止り、その實在性 (Realität) を與へない。追感は他人を一般に我等自身の自我の實在性と同様な實在性の意識に齎すことがない。故に我等は小説中の人物や俳優が演ずる劇中の假構人物の喜びや歎きを追感することは出來るであらうが、我等が一般に美的態度を持し、*Wirlichkeit-felnahme* に身を置かぬ限り、彼等との真正なる共感⁽³³⁾は持たないのである。即ち、眞の共感⁽³³⁾は他人の心の實相が眞に *wirklich gegenwärtig* に與へられ、それと同様の實在性を以てこれを體驗する點に於て、更らに彼の心への *Wirlichkeit-felnahme* を持つ點に於て追感とは異なる。現前の意識體驗の實在性は認識されずして體驗される。より正しく云へば體驗されるものゝ實在在であり、體驗されることに於て——單に考へられることゝは反對に——成立する所の現實在である。斯くて之は絶對的なる現實在である。之に比べて、あらゆる認識されたる現實在は二次的なるものである。リツプスの云ふ如く此の認識されたる意識體驗は、それが觀察される度合に應じて此の體驗の現實在に配與する傾向をもち、斯くて新らたに全き體驗となり共感、同情を生せんとする傾向があるかも知れないが、斯る傾向の存否にかゝらず追感と共感とは明白に區別されねばならない。共感に於ても先に述べた現象的自我間隔又は志向的存在間隔は存在する。此の點に於て共

感は此の意識を缺き他人の意欲を他人のそれとして把握することなき、没理解的なる一體感及び感情傳染と異り、追感と等しい。ジンメルが歴史的認識について、自己の理解作用の遂行と、理解される意識活動が他人に於いて生起したと云ふ意識とは、恰も外界の直觀に於て感性感覺と空間直觀とが原始的事實として結合して居るが如くであると云つて居ることは、全き理解としての共感にも當て倣まる。併しながら、追感が表現形象を表現形象として理解するに止るときは、その對象化の故に疎隔(Entfremdung)が目立つて現はれるのに對し、自らも眞に相手とゞもに喜び又惱む共感には斯る疎隔がない。斯くの如くにして本來の共感同情と追感とは區別される。斯る共感同情が、一定の目的達成に貢獻する機能を成員が行ふことを求めるのみで、内面的生活全體への要求は少しも有たぬ利益社會に於て⁽³⁴⁾よりも、共同社會に於てより多く生ずるであらふことは論を俟たない。

(七)

凡て私が他人の惱みに共感し得んがためにはその惱みが已に何等かの形に於て私に與へられて居らねばならぬ。共感他人の體驗について、その本性と特質と

についての何等かの形式の知識を豫想し、斯る追感の上に立てられるものとされる意味に於て、追感よりも高次の作用と考へられねばならぬ。兩者の間に如何に根本的の相違あるかは、前者は後者なくしては與へられぬのみならず、後者はその上に共感とは正反對なるもの例へば反感等がその上に打立てられる場合にも尙存在すると云ふ事實によつて最も明瞭になる。⁽³⁵⁾

追感は他人の體驗への何等の關與をも含まない。我等は追感に於て、相手に對し全く無記に對立することが出来るであらふ。泣く子供の顔に於て痛みの表現を見つゝ、それにもかゝらず子供に何等の同情をも持たぬ事もあり得る。共感はいつも此の他人の已に理解され把捉された體驗に向つて歩み寄る (hinzutreten) ものである。本來の共感事實上の關與は追感に於て與へられた他人の感情の實相への反應として展示される。此の意味でそれは單なる理解以上の積極的能動的なる作用である。理解・追感は本性上 *feltios* なものである。之のみでは心的相互作用の基礎、豫件をなすけれども未だ十分ではない。他我の喜びの理解の上に、彼の喜びを喜ぶことゝ彼の喜びに悩むことがある。又同様にして他人の悩みに悩むことゝ彼の悩みに喜ぶことゝがある。他人の心的活動の理解の次に生ずる體驗には、相手の心の状態と性質

を等しくするものと、反對なるものがあることを知る。他人の心的活動の把握理解はすでに、相手の生表現に對する一種の反應である。故に理解の上にこれへの反作用として生ずる一種の作用を此處にかりに返應 (Antwortreaktion) と呼び度い。此の返應こそ心的相互作用の系列の最後の項をなすものであつて、此處に作用の相互性・發展性の基礎があるとも考へられる。相手の心的活動が共感に於て實在的に現前するのは理解の極致であるが、之と共に生ずる感情的關與同情は已に返應の域にまたがるものと見られると思ふ。此の感情的關與によつて、追感に於て知覺された他人の苦惱の中に突き進み、之に對しての新らしい力の提供を我知らず喚起されるであらふ。純粹に道德的なる性質の人とは、他人と等しい實在性を以て他人の苦患を理解するのみならず、斯くて捉へたる苦患への感情的關與の故に二重に心を壓せられる人でなければならぬ。此の意味に於て、單に認識し理解するのみなる追感は、倫理的な立場から云ふも全く中性無記なるものであつて、倫理的價值判斷の對象となり得るは、之に基づけられたる返應でなければならぬ。返應こそ、積極的なる對他的社會的契機をなすものであつて、我が汝と呼びなす所の一つの自我の心的活動に於ける此の返應を得んことを、相互作用に於ける表現は目的として居るのである。

凡て、社會化されたる人間の他人に向つての生表現は、相手によつて發展せしめられ満される可き要求を有つて居る。之が何等かの仕方であつて彼の心を動かしてその返應に於てかの生表現が自己の持つ使命に従つて發展せしめられる所に、社會的相互作用の成立存續がある。而して此の満され方、發展の仕方に種々の差異があり類型のあるのは、即ち返應の差異にもとづくこと最も大であると考へねばならぬ。

返應も直接に行はれ、客觀的當體的意味内容が要求する所が其の儘發展成長せしめられると共に、情意的意味内容に對しても、溫き返應が行はれ満足が與へられる場合がある。之即ち感情的關與であり、眞正の同情に立つ返應であつて、斯る促進的な返應に於て、相手の心は十分なる意味に於て満されるのである。眞實なる愛は、已に與へられたる價值に、猶可能的なるより高度の價值に對する運動志向が加はる所に存在する。溫き感情もて包みつゝ相手の心を満し導き實現せしめて行く同情的返應は、之を基礎づけ之に對する心の用意としての愛親和關係、共同社會的關係ある所に可能である。

之と異り、自他を峻別し、自己の利を關心の中心として、他人を之への手段と見做す利益社會的關係に於ては、他人の情意の動きが心に映ずるとしても、その映じるた影

は遂に全き實在性を得るに至らず、斯くて又此の情意に對する溫き返應を缺く可き高度の蓋然性が存する。斯くて此處に於ては、當體的意味内容の要求する所のみが返應を見出し、何等情意に於て答へられることなき粗硬にして冷かなる、恰も意識ある自然物の返應とも形容される可きものが成立する。併しながら之に於ては心的要求の客觀的側面は滿され得るが、潜在的鬭争の關係を地盤とする推定に於ては相手の心の實相が把握されざるが故に、之を滿す様な返應は主觀的客觀的何れの側面に於ても行はれ難いのは必然である。對象化され歪められつゝも把握されたる相手の動機と心情も、それ自身の充足發展のために返應されずして、自己の目的利益に役立つ限りに於てのみ充たされ促進させられるに過ぎない。此處に於ては把握された他人の心に對する返應が生ずるのではなくして、他人の心的活動を機縁として、自利に關する心の活動が生じ、此の置き替へられた自己自身の心的活動に對する返應が、相手の心的活動の充足を素材手段とするのである。社會的作用が此處に見出す返應には、自己の充足發展と共に或る部分に於ける衝突食ひ違ひがあり、感情に於ける反撥さへも含み得るものたることが期待される。

最後に何れの意味内容に於ても充足發展せしめられることなく反撥否定破壊さ

れる如き返應があり得る。heteropathische negativwertige Gefühle と シェーラーの名附ける所のもの、即ち嫉妬、毀傷の喜び等に於ては、憎む相手の苦痛と傷害とを十分に理解しつゝ、之に對して喜びを感じる。之が idiopathische positivwertige Gefühle を異るは、相手の心的活動への情意に於ける返應が、相手のそれを促進し満すものに非ずして反撥し傷げんとするものなる點に於てある。⁽³⁶⁾ 之の極端なるものは慘忍である。慘忍な人間が相手に於て醸す所の苦惱は、自分に追感の作用に於て全く與へられる。而して彼は正さに彼の犠牲者の苦痛に於て喜びを感じる。此の喜びは他我の苦痛を自らに於て享樂せんとする返應である。慘忍なる人間は相手の苦患に對して無感覺なる人間では決してなく、十分に之を感得しつゝ、之に對して享樂的なる返應をなすものである。斯る返應は相手の心的活動を否定破壊する所に成立つ。此處にも相互作用はあるが何等の充足發展もない。斯る返應は顯在鬭争的關係、フィアカントの所謂物的關係、社會外的關係に於て常に起る可き可能性を有つものである。

(八)

以上心的活動より返應に至る迄の要素の考察を以て、社會心理的相互作用の循環

過程の分析的考察を終る。此等諸要素は決して夫々の分離獨立して形成され完結せるものではなく、一人の心より他人の心に至り、此處に答へを見出す過程の中に、分つ可らざる契機として成立存在するものであり、此の過程は自らの發展の中に自らを形成しつゝ進行するものなる故、これが契機は此の過程全體の發展の仕方、様態に規定されつゝ現はれ來るものであつて、單獨に切り離して考へる可らざるものである。個々の要素の和から相互作用の過程が成立するに非ずして、相互作用の過程の中に個々の要素は成立つのであるが故に、分つ可らざるものを思惟に於て分ち取出して考察した後、爲す可き仕事は、再び之を全體の過程に戻して考察することではなければならない。

先づ第一に考察される可きは、共同社會的關係に於て生ず可き最も高度の蓋然性をもつた所の、心的活動の内容を全て含んだ要素から成る過程である。之に於ては、心的活動が自發自展して表現形象となり、之が端的に把握され、濫き情意に包まれつゝ肯定され満され促進される。此の過程は當體性への反省、又それのみを對象とする把握と返應によつて弱められ生氣を奪はれることなく、情意を豊かに含みつゝ發展する。相互作用は只一つの働きの發展であり、相互作用の過程そのものが實在的

統一であつて、各人の狭き個我は消滅し去り、斯くて相互は時空に於ける分離にもかゝわらず、本質的に結合されたるものとして共働する。心的活動の全内容を擧げて、その儘に、之に何等の暴力を加へて害ひ生命を奪ふことがない故、相互作用は眞の直接性具體性を有し、豊かなる情意的内容に於て人格性が相互の心の奥底に入り込む。斯る相互作用は之を親和的相互作用と云ふことが出来ると思ふ。

第二の過程としては、當體的知的客觀的意味内容を主要内容とする所の、利益社會の基礎をなす概念的條規に規定される諸因素より成ると考へられる過程が考察されねばならぬ。

之に於ては相互の心的活動の志向は専ら對象的客觀的に固定せる意味によつて盡くされ得る事態に向けられ、我も汝も個性を脱した純粹に當體的理論的な態度を以て交るが故に、反省的思惟の主宰によつて、情意的なるものが脱落し去る。生氣ある人間性を表示し、又之に透入する如き作用は只に求められざるのみならず、反つて孜孜として排除されるが故に、相互作用の基底をなすものも又内容として残るものも、唯かの普遍的超越的なるものであり、彼つて、全過程は、親和的相互作用のそれとは全く別異な様相を呈示する。具體直接なる生表現が相結ばれて織りなす生動的な

る活動は消滅し、粗硬なる當體性が相互作用の全幅を滿すが故に、親和的相互作用に存した原本的なる統一性、相互を抱括する過程全體の實在性は失はれ、明確性と分化とはあるとしても、生の濫味、直接性の缺けるのは免れ得ない。親和關係に於て相互が相融合し *In-und Miteinander* の結合をなしたのに對し、此處に於ては *Ausser-und Gegenüber* の關係はなさぬとしても、一種の緊張に富める對立性を持つる *starre Gegenüber* の關係をなすことは認められねばならぬ。新る相互作用は、之を機械的相互作用と名附けられ得るであらう。第三の過程としては、相互欺瞞又は根本的不信の關係に於て生ず可き蓋然性をもつたる要素、即ち内容の兩面を含むもそれが限られた一小部分宛たるに過ぎざる如き要素から成る過程が考察されねばならぬ。之に於ても僅か小部分に限られるにもせよ、心的活動の何等かの部分が、相手に傳はり滿され發展せしめられ得る可能性あり、此處にそれが相互作用の過程として成立得しる根據がある。併しながら斯く滿される一部分の外に於ては、衝突、食ひ違ひの可能性が大であつて、命の直接性は云はずもかな、機械的相互作用に見られる劃一性、明確性も失はれ、相互肯定、促進が極度に少く限られたる過程をなす。之を潜在鬭争的相互作用と呼ぶことが出来ると思ふ。最後に何等の肯定充足發展もなく、しかも相互作用の行

はれる過程がある。社會外的關係又は物的關係と云はれる所のものゝ上に成立つものが即ち之である。之は相互に相手の心的活動に何等の顧慮もする事なく、只相互に破壊潰滅し合はんとする過程と考へられるが、相互の心的活動が全然傳はらぬのではない。相手が人間であると云ふ意識には嚴密に云へば相手の苦痛等も直ちに附着して居る故、之を把捉しつゝも何等の返應も與へざるか、反撥的に返應するのである。更らに、右の如く相手の心的活動に顧慮せざるに非ずして、其の全内容を内容としつゝもとづいて、親和的相互作用とは正反對な過程をなす相互作用がある。返應の差に敵意憎惡は親愛に劣らざる激しさを以て相手に對して直接に自己を告示し、そこに如何なる變化や緩和さへもなしに、相手の心に向つて進む。斯る激情を迸出せしめる者は亦相手の心の内奥を探知せんとすることも疑無き所である。斯くて相互の心的状態に對して親和的相互作用に劣らざる關心をもち、従つて同様なる内容の豊けさをもち同様の直接性をもつて營まれつゝ、方向に於て全く反對なる否定的破壊的なる過程の一類型が得られるのであるが、之は鬭争的相互作用と名附けられる可きものであらふ。

以上相互作用の背景地盤と、相互作用の内容との間に存す可き密接なる聯關にも

とづいて、相互作用の主要類型を考察したのであるが、斯る關係との聯關を離れて此等の要素を順列的に結合するときは、先の四種の過程の外に猶種々なる過程が構成されるのであらう。そのあるものは社會的現實態に實現されること多き意味に於て實在性あるものであり、或るものはまた現實されること極めて稀れなる意味に於て假定の世界に屬すとも云はる可きものであり、他のものは本質上結合し難き要素の集合より構成され、それ自身矛盾せるものなるため、只想像の世界に於てのみ存在を有し得ると考へられる如きものであらう。此等凡ての過程を夫々考察することは相互作用の組織的研究に課せられる課題であらうが、今は之を試みる暇がない。併しながら此等種々なる過程の究明は先の主要類型を基とし、之等からの逸脫的なものとしての考察すれば足りると考へられる。何となれば、一相互作用の各要素は本來、心的活動の同一なる内容を有つ可きことは、即ち、各要素間に内容上の對應の存す可きことは、相互作用そのものゝ本性上要求されることであると考へ得られるが故である。表現に於て自己を告知せんとする衝動は相手が我に示す關與、理解の度合に應じて目醒め成立しました消滅し、同様にまた理解に對する心の態度は、相手の表示する心の深さの度合に應じて定まる様に、各要素は、その成立の途上に於て相

呼應し規定し合ひつゝ自らの内容を定めるが故である。故に例へば直接にして情意豊かなる表現に對しては、溫き人格的關與ある理解が働く可き蓋然性が大であり、純粹に當體的なる内容のみに向ひ何等情意を顧ることなき冷かなる客觀的當體的理解の行はれる蓋然性は小であると云はなければならぬ。若し斯る内容上の相違ある作用が一過程をなすときは、表現者が相手に傳はり働くことなくして空しく消える情意的内容を撤して、當體的意識内容のみを中心として働きかけんとし、斯くて彼の心的活動、従つて表現も、當體化されるに至るか、或は又、相手をして自己が表現する情意迄汲まんとする深き理解を行ふに至らしめるかの何れかであらう。斯くて相互作用の要素は相互に規定し合つて、各作用の内容範圍度を等しくし來る様、水準化・對應化を行ひつゝ、それが構成する過程を發展せしめて行くであらふことは、各要素が互ひに他を豫想し要求し満し合ふことによつて成立する相互作用の本性上當然のことゝ云はなければならぬ。社會心理的相互作用は要素的作用の和から成立するものではなく、各要素に同時性があり一つが他を制約して、切り離されざる性質をもつ點に於て個人心理的事實以上のものである。愛そのものゝ意義の中に返愛への要求があり、愛の理解作用そのものゝ中に返愛への *Altegrung* がある。愛の

作用、情の作用は双方の個人によつて營まれる要素的作用の對應の中に初めて成立發展する。⁽³⁷⁾ 個々の契機的作用の主體たる個人も社會化されて居ると云ふ關係に於てのみ、斯る作用を營み得る點より見れば、相互作用の過程に於ては二次的の又は相關的なる實在性をもつのみと云れは得る。ワルターが結合の層の異るときはその結合は未だ滿されざるものであつて、層の同一なる結合への希求は、結合の意味及び本質から生じ來る内在的要請であると論ずるのも、⁽³⁸⁾ 斯る相互作用に於ける對應の考へと一つに歸するものであり、又シュタインが體驗に於ける平行 (Parallelle beim Erlebnis) と云ひ、リットが過程の對應關係 (Korrespondenz der Vorgänge) 又は作用の構造的對應 (strukturelle Entsprechung der Wirkungen) を説くのも、⁽³⁹⁾ 亦同様な考へを述べたものに外ならない。

故に我等にとつて重要なものは相互作用の組織的研究よりも、今迄辿り來つた相互作用の考察から、翻つて、斯く考察し來るに當つて、常に考察の背景に置いた社會關係の概念を分析することであると思ふ。從來多くの學者によつて、或は相互作用と混同され、或は之を根柢に置いて又は之と相關々係を保ちつゝ構成された社會關係、社會形態の概念を此の相互作用の考察と結合して究めることこそ正さに殘された課題であると云はなければならぬ。

- 1) 高田博士：社會關係の研究 一一二頁以下、二四〇頁以下
- 2) G. Simmel : Die Probleme der Geschichtsphilosophie, 5, Anfl. S. 16, 27 f.
- 3) M. Scheler : Wesen und Formen der Sympathie, 2, Anfl. S. 166 ff.
- 4) S. Kracauer : Soziologie als Wissenschaft, S. 37, 114.
- 5) A. Reimach : Die apriorische Grundlagen des bürgerlichen Rechts, S. 700, 709.
- 6) H. Freyer : Theorie des objektiven Geistes, S. 82.
- 7) G. Simmel : Soziologie, S. 5.
- 8) G. Simmel : Lebensanschauung, 2, Anfl. S. 71 f.
- 9) Freyer : a. a. O. S. 18 f. Simmel : Geschichtspsh. S. 34, 48. Simmel : Lebensanschauung, S. 52.
- 10) Th. Lipps : Psychologische Untersuchungen Bd. I Hf. I. Bewusstsein und Gegenstände, S. 79, 82, 35 f.
- 11) Th. Lipps : Individuum und Gemeinschaft, 3, Anfl. S. 158 ff. Freyer : a. a. O. S. 25, 60.
- 12) Lipps : a. a. O. H. 4. Das Ich und die Götter, S. 692 f. 西田博士：意識の問題 六〇頁以下 Simmel : Geschichtspsh. S. 17 f. Fussnote.
- 13) K. Stein : Beiträge zur philosophischen Begründung der Psychologie usw., Jahrbuch für Ph. von Husserl Bd. V. S. 140.
- 14) Freyer : a. a. O. S. 40, 60. Lipps, a. a. O. S. 24 f. Simmel : Lebensansch. S. 52.
- 15) Scheler : a. a. O. S. 8 ff. M. Scheler : Der Formalismus in der Ethik usw. 2, Anfl. S. 520.
- 16) Scheler : Sympathie : S. 16 f. Scheler : Ethik S. 547.
- 17) Stein, a. a. O. S. 116. Freyer : a. a. O. 18.
- 18) Litr. a. a. O. S. 173 f. 180, 201 f.
- 19) G. Walther : Ein Beitrag zur Ontologie der sozialen Gemeinschaft, S. 35, 46.
- 20) Scheler : Sympathie : S. 259.
- 21) M. Weber : Wirtschaft u. Gesellschaft, S. 21.
- 22) A. Vierkant : Gesellschaftslehre, S. 287, 275, 216, 210 f.

- 23) Lipps, a. a. O. S. 41 f.
- 24) F. Staudinger: Wirtschaftliche Grundlagen der Moral. S. 20 f. 60, 69.
- 25) Freyer, a. a. O. S. 30 f 26 f 36 f.
- 26) 增田氏. 實驗心理學序說 四二一頁以下.
- 27) Lipps, a. a. O. H. 4. Das Wissen von fremden Ichen. S. 713 ff.
- 28) Stimmel; Geschichtspsh. S. 37 ff.
- 29) 西田博士. 前掲書 九八頁.
- 30) Scheler: Sympathie S. 11 f.
- 31) E. Stein, a. a. O. S. 43 ff.
- 32) Scheler: Sympathie S. 302 f. Scheler: Ethik. S. 496 f.
- 33) Scheler, Sympathie S. 5. 115.
- 34) Stein a. a. O. S. 258.
- 35) Scheler, Sympathie. S. 4. 9 ff.
- 36) ibid. S. 161.
- 37) 萬田博士. 前掲書 二一頁. 一一五頁以下. Scheler: Ethik. S. 558 ff.
- 38) Wälther a. a. O. S. 65 f.
- 39) E. Stein, a. a. O. S. 191 f.
- 40) Jilt, a. a. O. S. 140 ff.